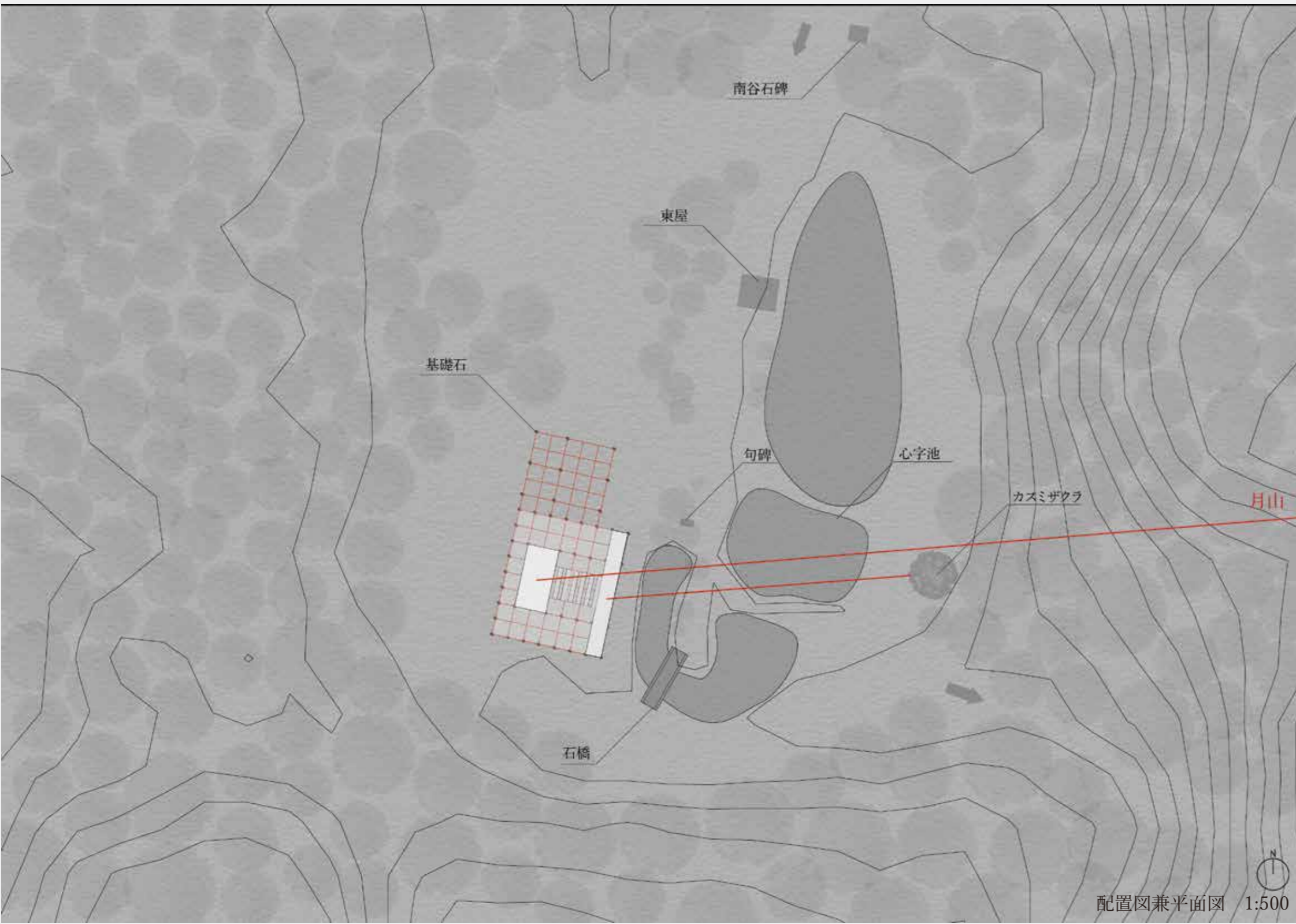


1. 風の記憶

遠く、月山から吹き降りる風。
その姿は見えなくても確かにこの地に残雪灰かに香る風が吹いている。風が月山と羽黒山の現実と過去の世界を繋いでいる。
「ありがたや雪をかほらす南谷」
かつて松尾芭蕉がこの地で読んだ句である。芭蕉もこの地で同じ風を感じていた。
雪をかほらすと有けん心の涼しさを感じられる掛け小屋としてこの地に人間と風土の関係を呼び起こす。



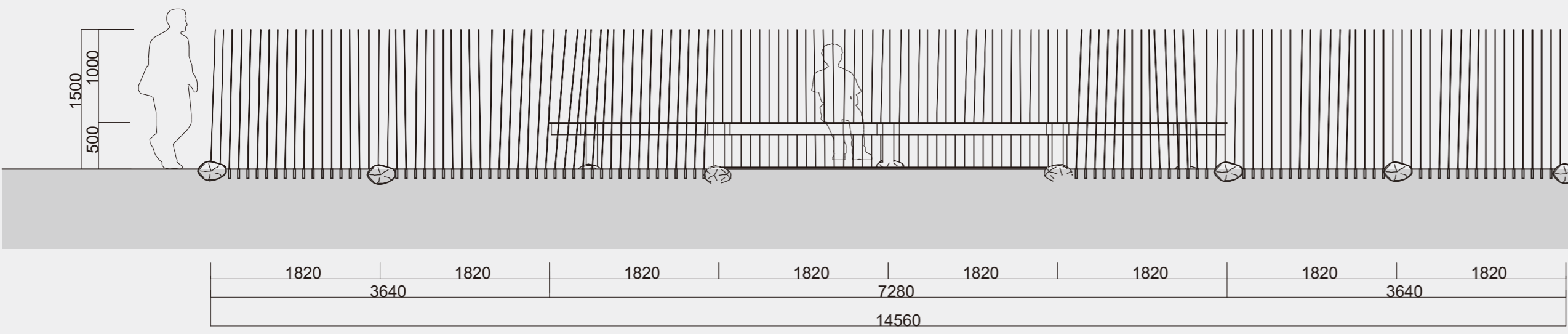
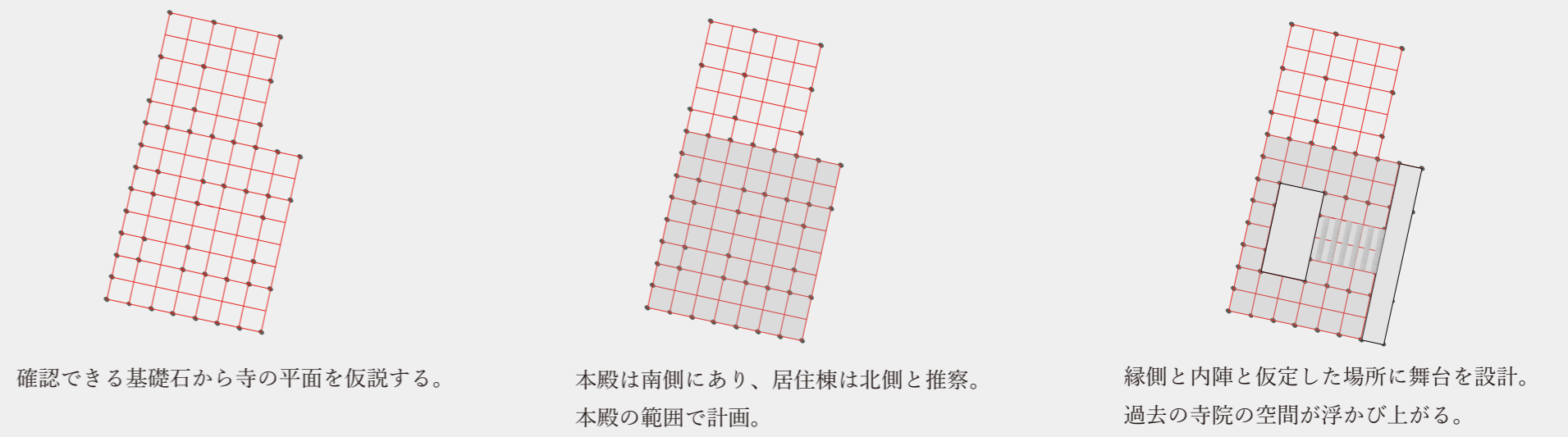
場所：羽黒山南谷
地霊対象：月山より降りる風
かつての場：南谷別当院

この地はかつて南谷別当院という寺院が在った。現在は寺院の基礎石と庭園しか残っていないものの、池や石橋からかつての寺院の姿がうかがえる。松尾芭蕉が訪れた江戸時代の頃は周囲の樹々が低く、月山の残雪が見えたのだろう。



計画

風になびく透明な穂。穂に囲まれた舞台。
かつての寺院からの眺めをそのままに庭園と一本のカスミザクラに向かった配置。
寺院の平面形態を浮かび上がらせ、羽黒山と月山、現実と過去を繋ぐ掛け小屋。
透明な穂はカーボンファイバーで構成。

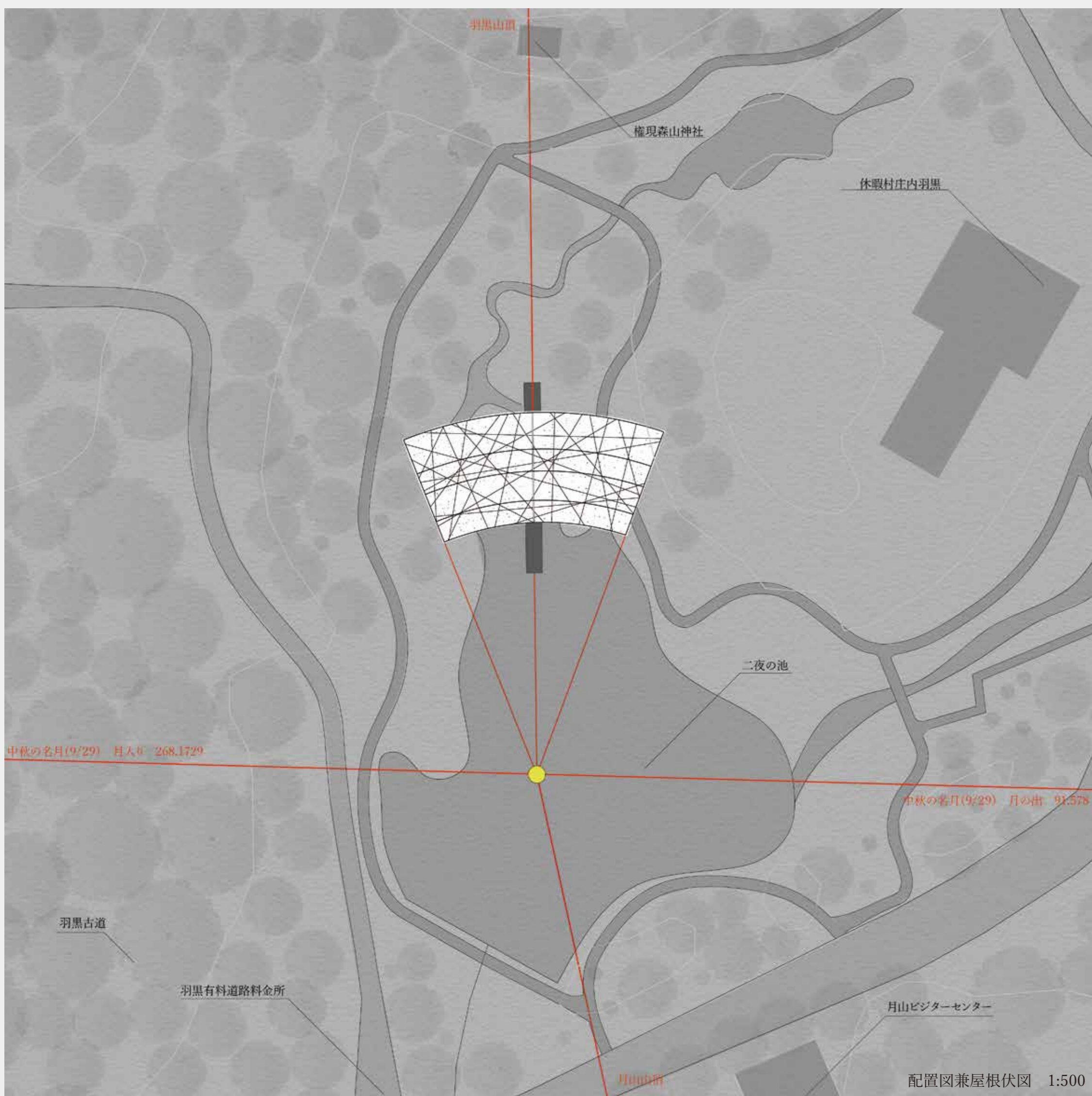
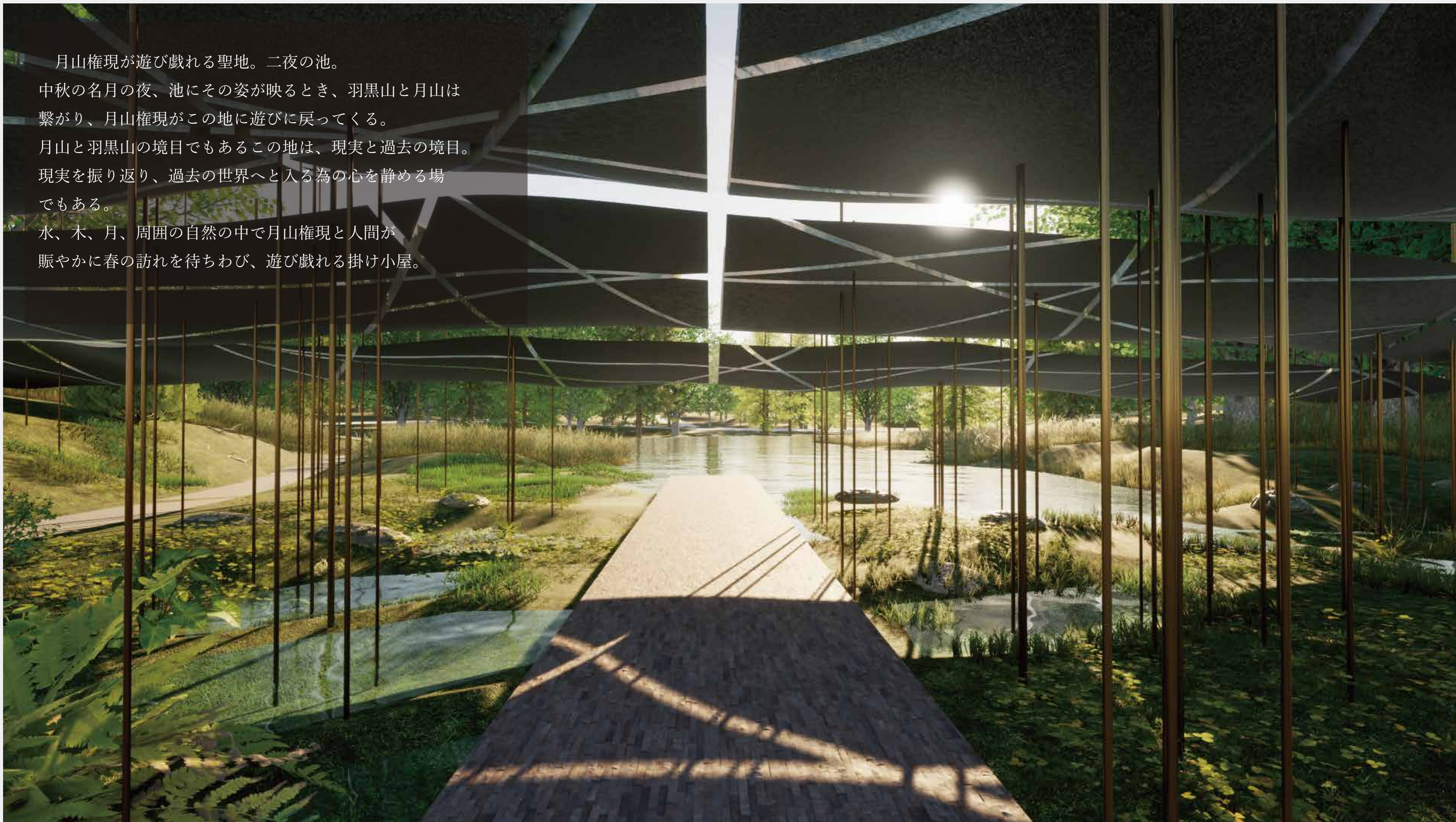


断面図 1:50



2. 二夜に帰す

月山権現が遊び戯れる聖地。二夜の池。
 中秋の名月の夜、池にその姿が映るとき、羽黒山と月山は
 繋がり、月山権現がこの地に遊びに戻ってくる。
 月山と羽黒山の境目でもあるこの地は、現実と過去の境目。
 現実を振り返り、過去の世界へと入る為の心を静める場
 でもある。
 水、木、月、周囲の自然の中で月山権現と人間が
 賑やかに春の訪れを待ちわび、遊び戯れる掛け小屋。



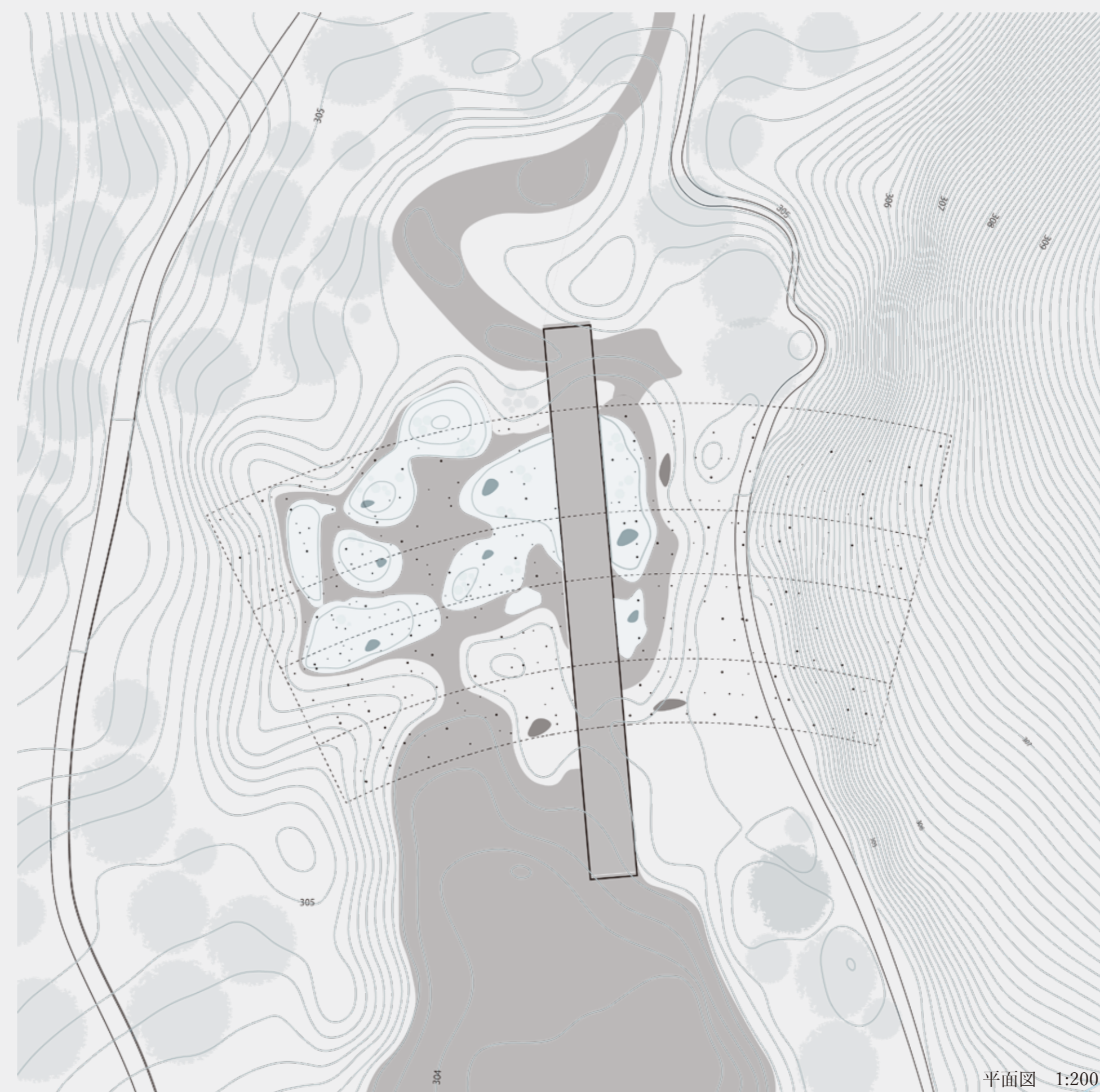
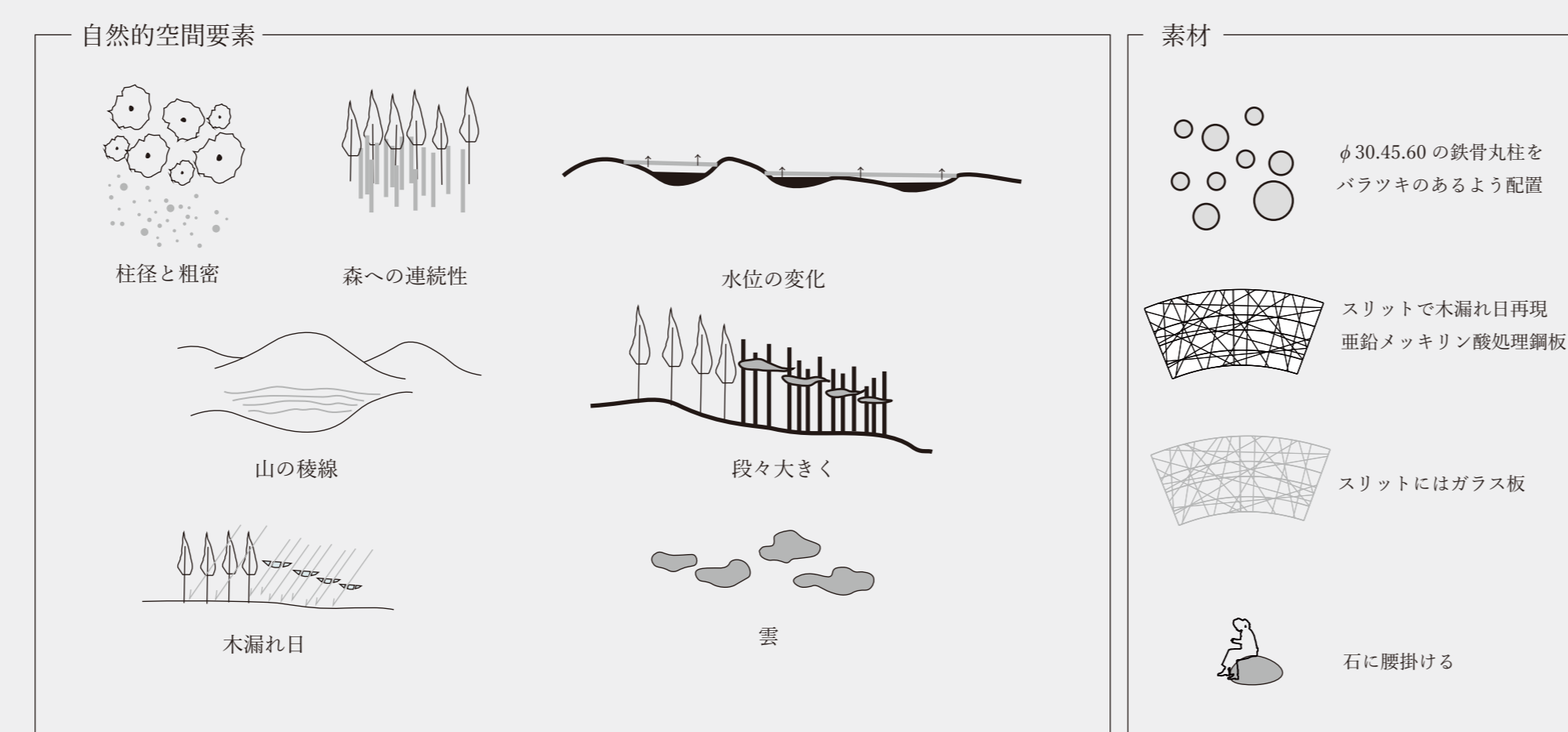
場所：磐梯朝日国立公園羽黒自然の小径
 地霊対象：二夜の池、月
 かつての場：寺院→空地→休暇村庄内



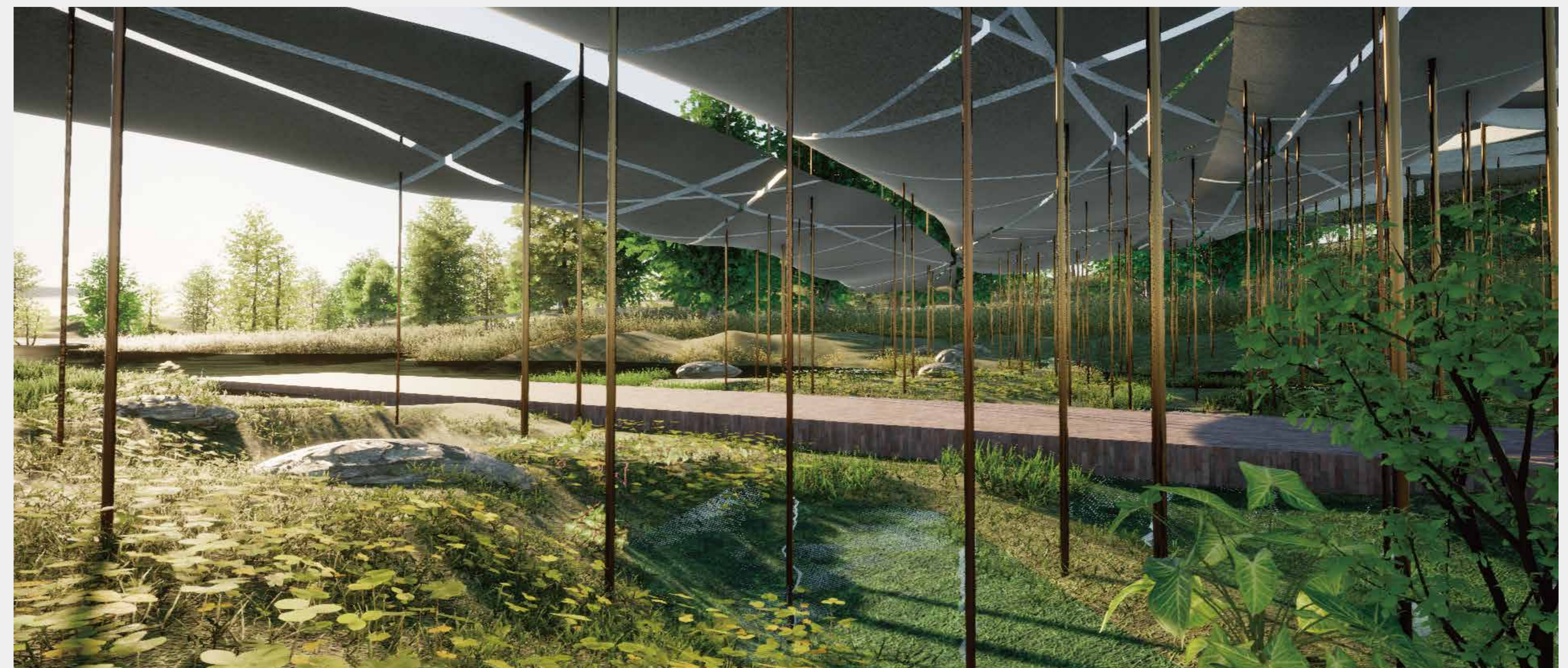
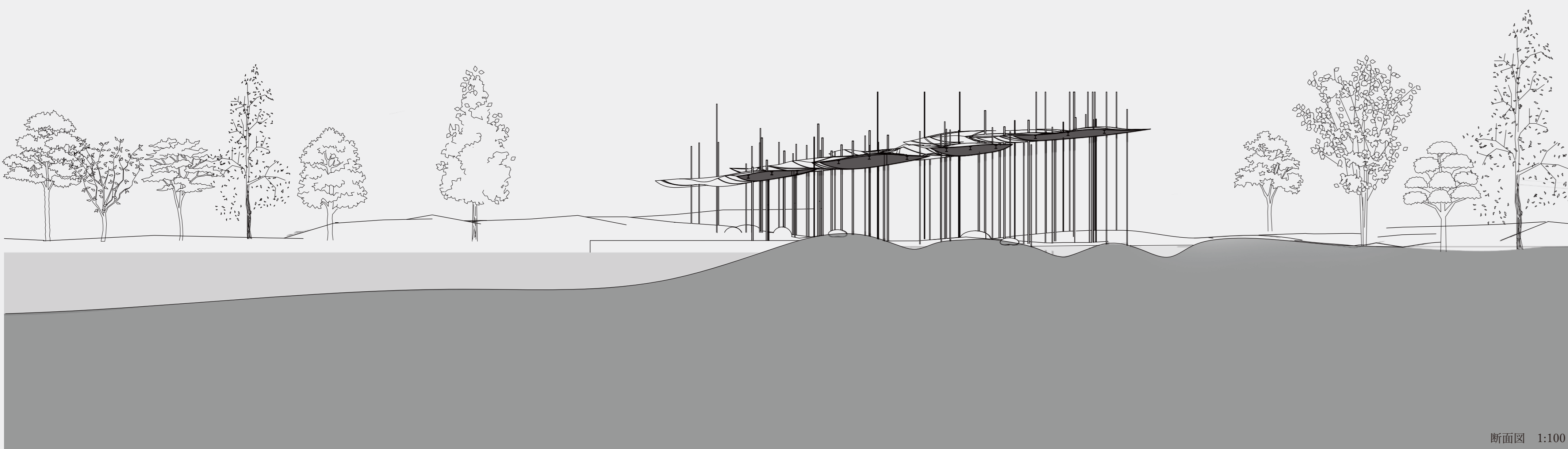
かつてこの地は寺院が存在していた。
 現在は国立公園となっており、隣接する休暇村庄内の宿泊者やレジャー客
 が訪れる。その敷地内に存在する二夜の池は月夜にその姿が映り、二晩分
 の月が楽しめるということが由来である。
 かつてより、この地は月山権現が閉山後の秋から春にかけて遊び戯れる聖
 地とされてきた。

計画

月見台を含む自然と遊具の狭間の親水空間。
 木漏れ日や池等、周囲の自然的空間要素から建築を計画していく。
 屋根伏形態を軸線に乗った形とし、空間は自然へと連続していくものとする。
 池の水位や日が差す時間によって変化の生まれる掛け小屋。



▲月山閉山後の中秋の名月の夜。月山と羽黒山の軸を池に映る月が繋ぎ、月山権現がこの地に訪れ、春の開山まで過ごす。
 ◀北側にある権現の森から流れ出す水が池に流れていく。その水を空間内に取り込み、巡らせていく。水位によって空間は変化し自然と呼吸し合う。



3. 誘い

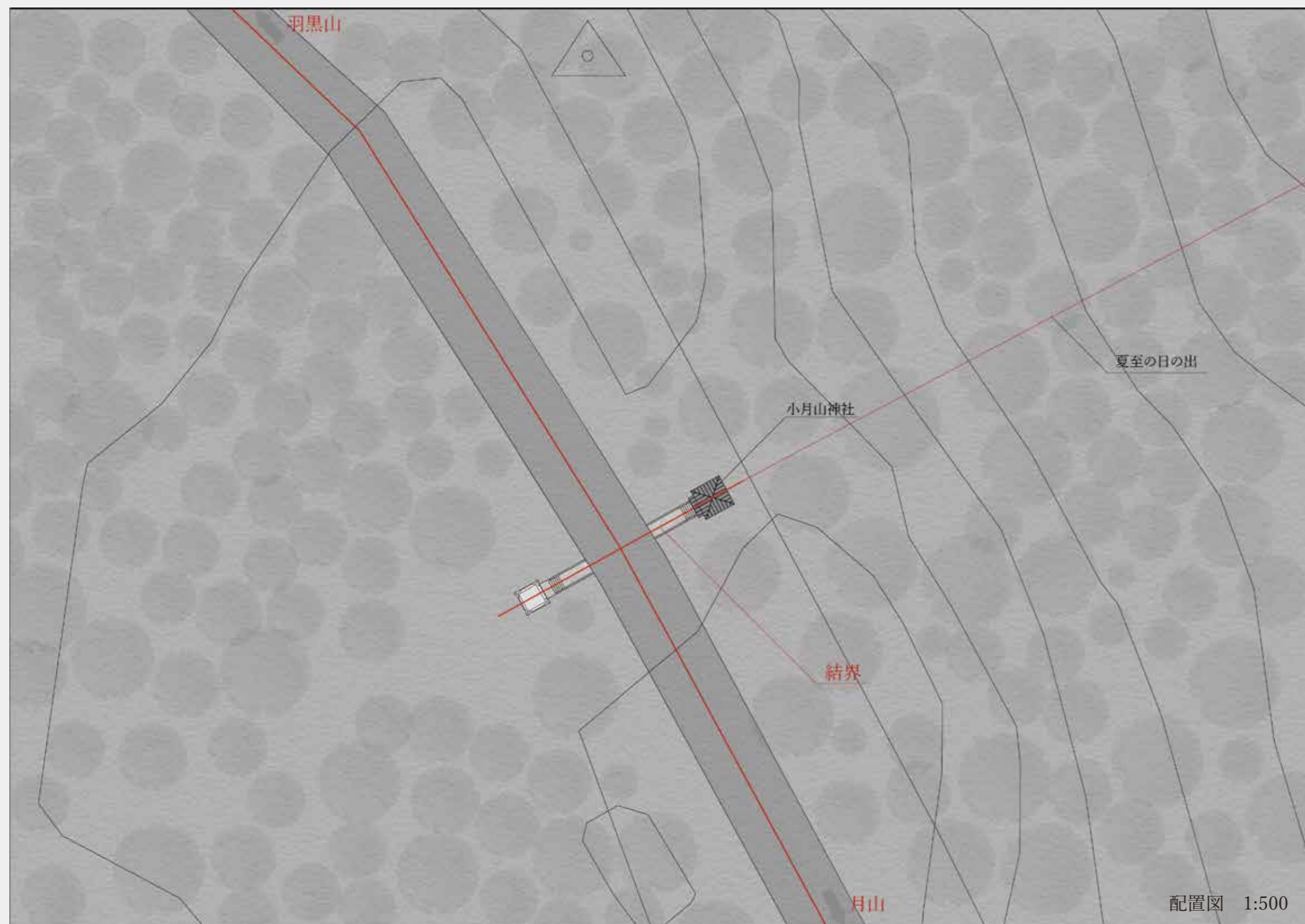
「月山一の木戸」大満。

線対象にある小月山神社が過去この地が結界であったことを教えてくれる。

水盤が照り返し、自然の奥行を感じさせ、月山の誘いが感じられる。

ここから先は過去の世界であり、天に近い場。

樹々が波打つ水で心身を清め、また別の世界へ。



場所：小月山神社（月山二合目：大満）

地霊対象：結界

かつての場：掛け小屋

かつてこの地は掛け小屋（大満小屋）が存在しており、「月山一の木戸」とされ、この先は女人禁制となっていた。少なくとも明治以前から存在しており、他の掛け小屋が仮設物であったのに対し、ここは木造で常設であり、賑わいがあった。その後、茶屋としての経営を挟みつつ、昭和34年にバス停ができることにより、鳥居と掛け小屋が壊されることとなった。女人結界時代と共になくなっていった。



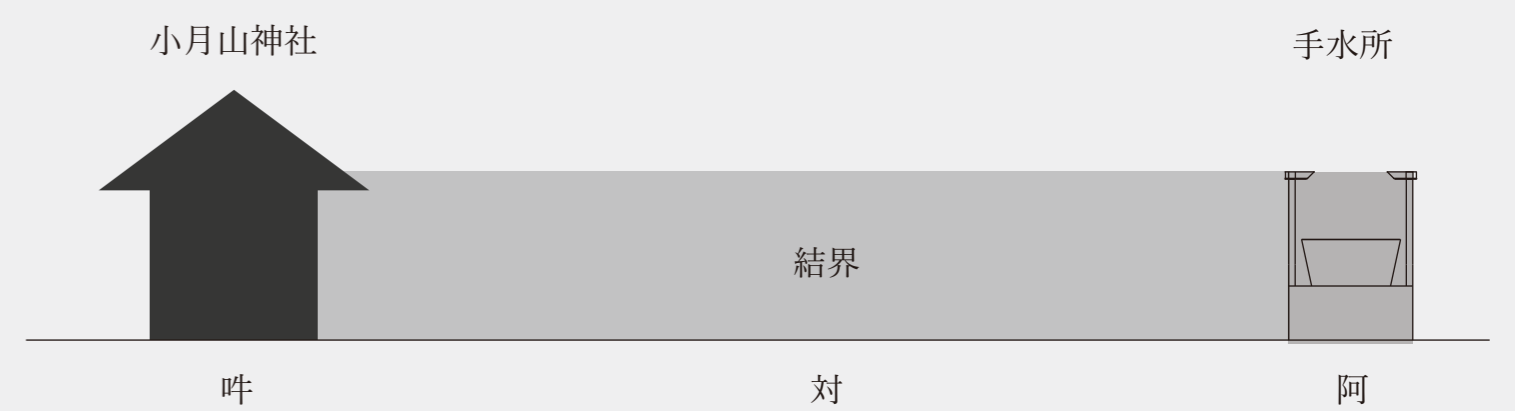
計画

小月山神社を対称にし、手水社を計画する。

対称性が見えない結界を作り出し、過去の世界への入口としての心構えを作り出す空間。小月山神社を「咩」とし、手水社を「阿」とする。

水盤が日没方向への奥行を作り出す。

「阿」は物事の始まりを意味する。



4. 空気と大地

長い山道を超え、視界が突然開けた。月山八合目弥陀ヶ原。背の低い高山植物が山を色付け、池が空の色を映し出す。その幻想さにここが過去の世界とされたことに納得する。掛け小屋の心木が月山山頂を指さし、まだまだ先は長いことを知る。空と大地の中で空気の粒子をこの地で感じ、また一歩足を進めていった。



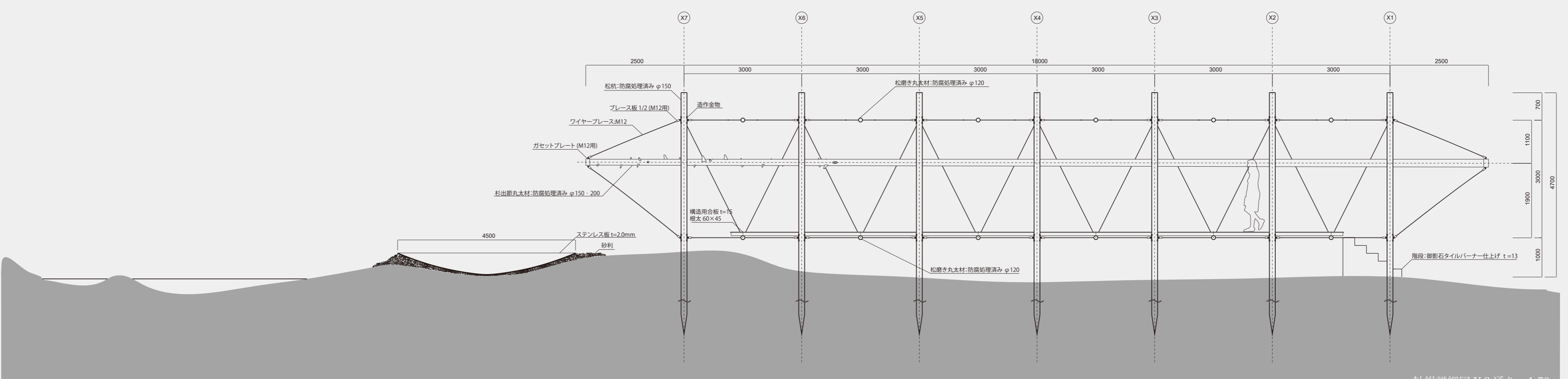
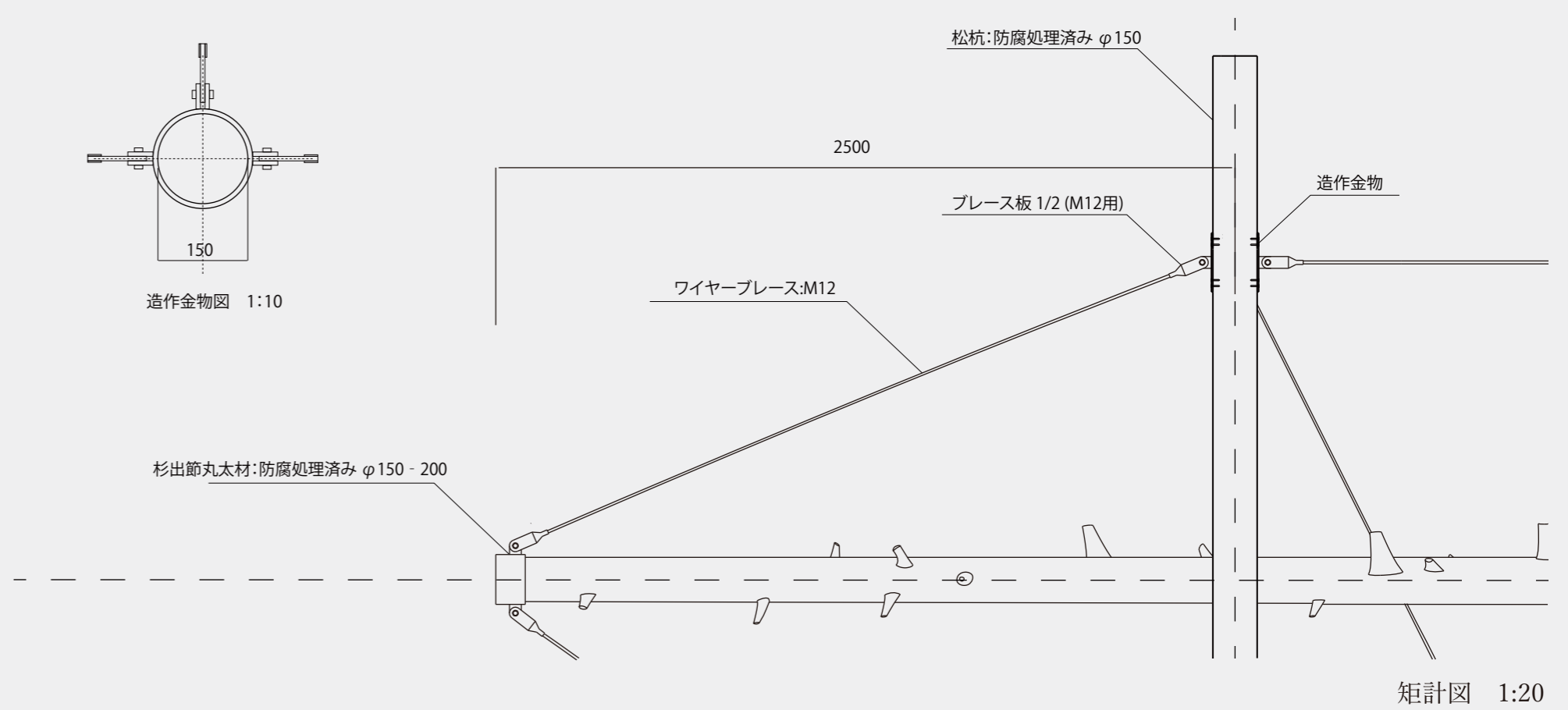
場所：御田原神社（月山八合目：弥陀ヶ原）
 地霊対象：池、空気
 かつての場：掛け小屋

月山の八合目、弥陀ヶ原湿原には、この世のものとは思えないほど清々しい景色が広がっている。今は八合目まで車道が通じていますが、かつて一合目から歩いて登った人は、突如として花々の咲き乱れる広大な湿地に到着、さぞ感動を覚えたことだろう。夏には百数十種の高山植物で埋め尽くされ、秋には一帯が赤く色づく。

弥陀ヶ原は、阿弥陀如来が祀られていたので「弥陀ヶ原」とも、神様が御田植えをされたことから「御田ヶ原」ともいわれている。御田原参籠所のとりにあるお社・御田原神社には、稲田の守護神である奇稲田姫神（くしなだひめのかみ）が祀られている。

計画

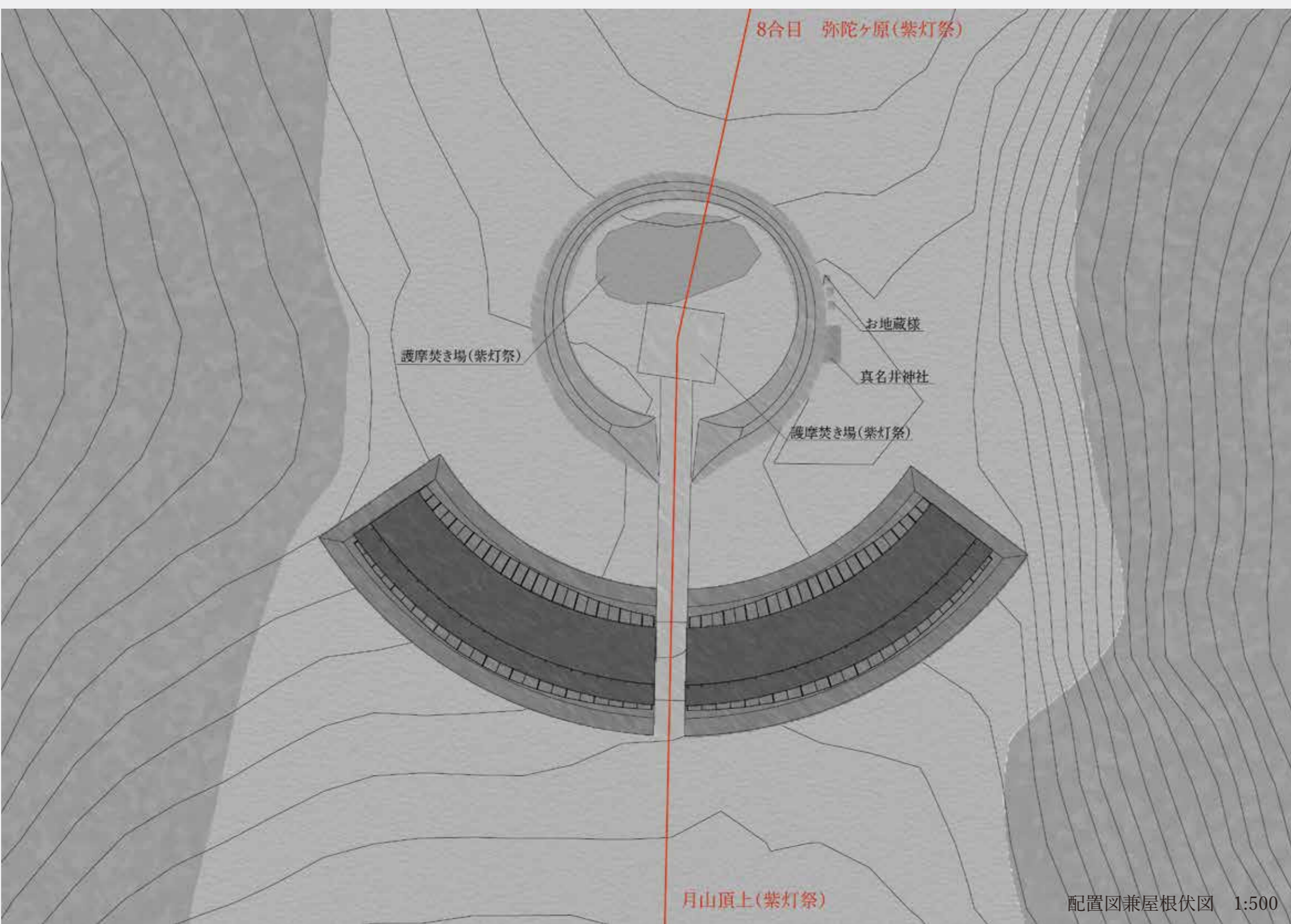
- ・天との距離が近く、空気が重く感じる場。
- ・重力と透明感のある掛け小屋を計画。
- ・月山頂上への方向指示性。
- ・弥陀ヶ原は月山紫灯祭の最終地点となるため紫灯祭時に護摩木を焚く場としての機能を備える。周囲の池に炎が反射し、天へと供養していく。



5. 過去を繋ぐ



頂上ももうすぐそこだ。9 合目佛生池小屋。
この先は厳しい行者返しがある。一休みをしよう。
池の周囲を真名井神社の石積が囲いそれをまた囲むように二棟の小屋がある。古来より、石積は祖霊供養の行為とされてきた。池がより近くなった天を映し、今は遠い先祖の影を呼び起こす。ここから見えた星や空は今も昔も変わらず、この地に訪れた人に自然と過去の記憶を思い起こさせる。掛け小屋の軸が頂上へと触発させる。あと少し。



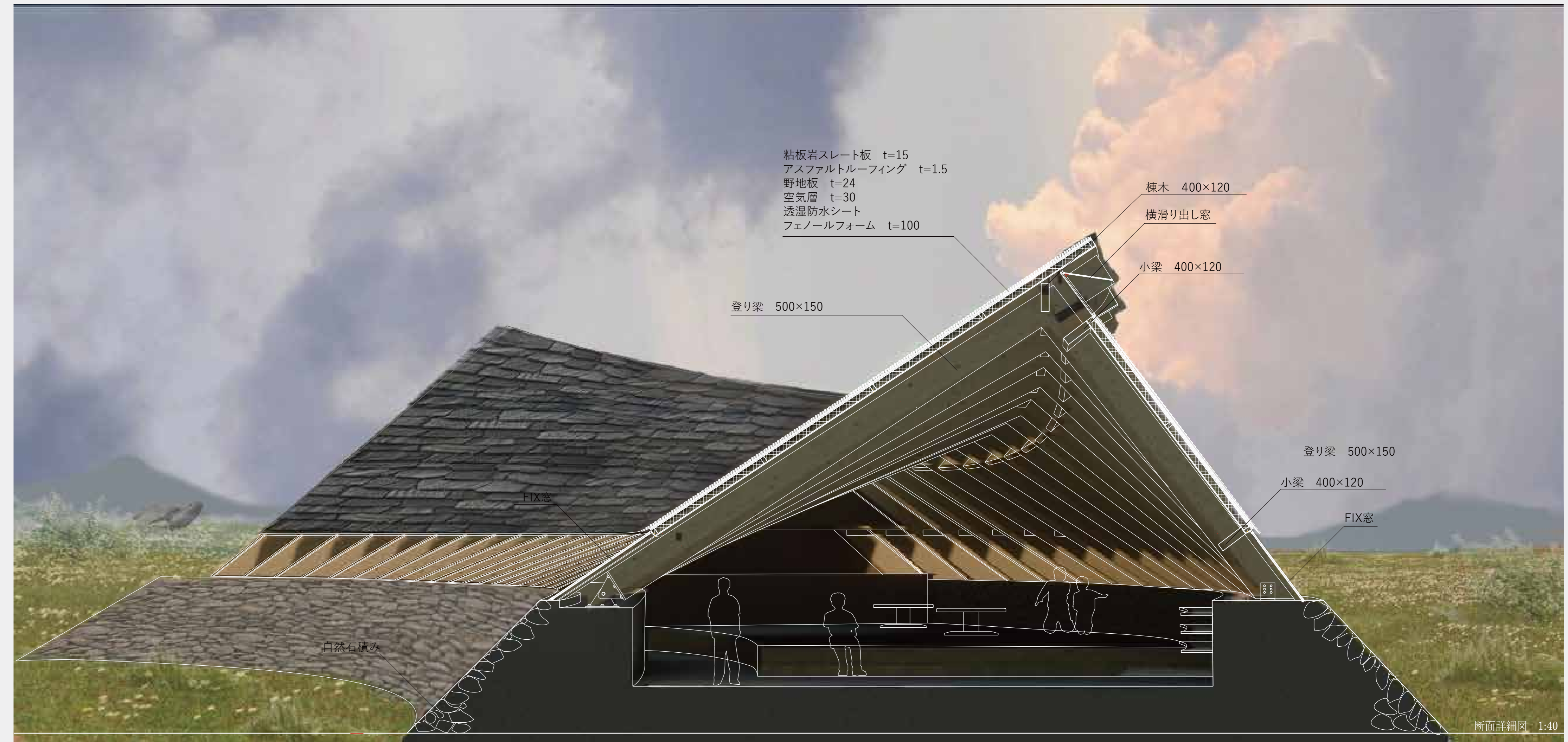
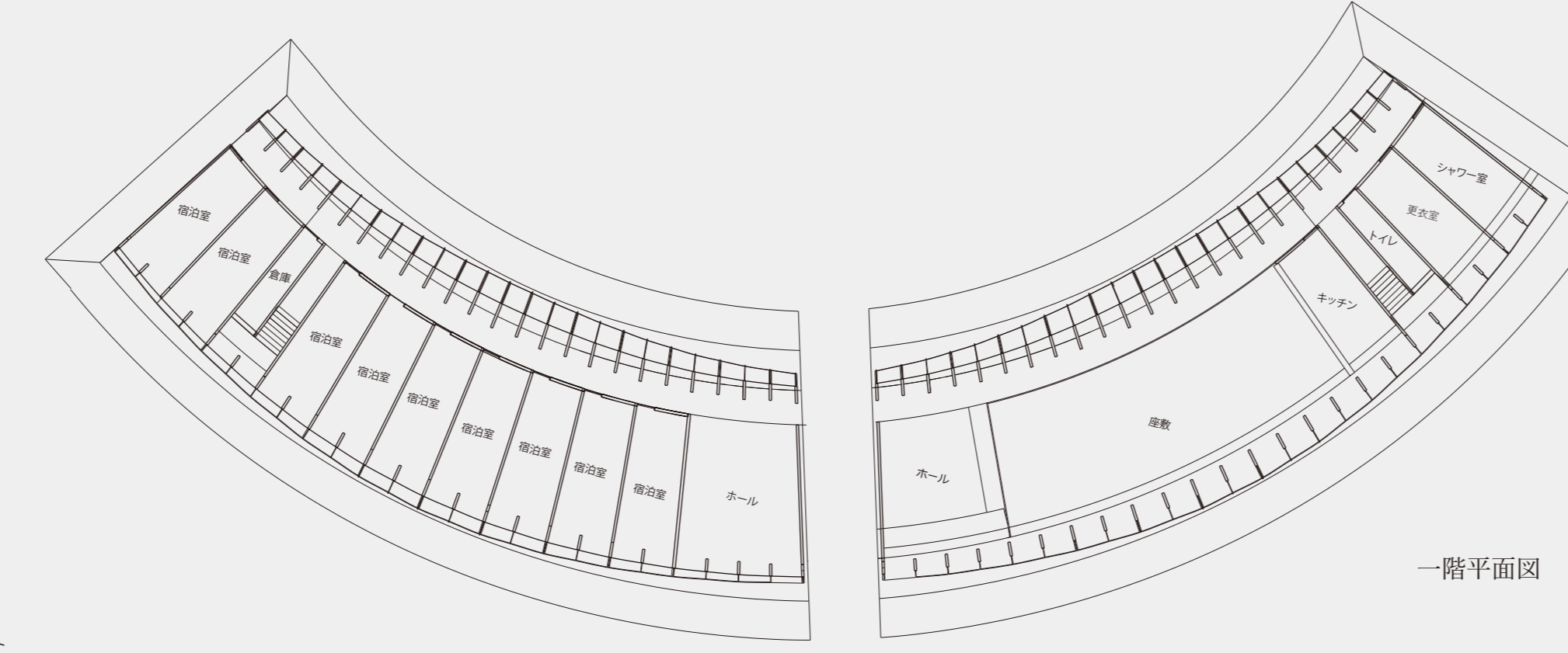
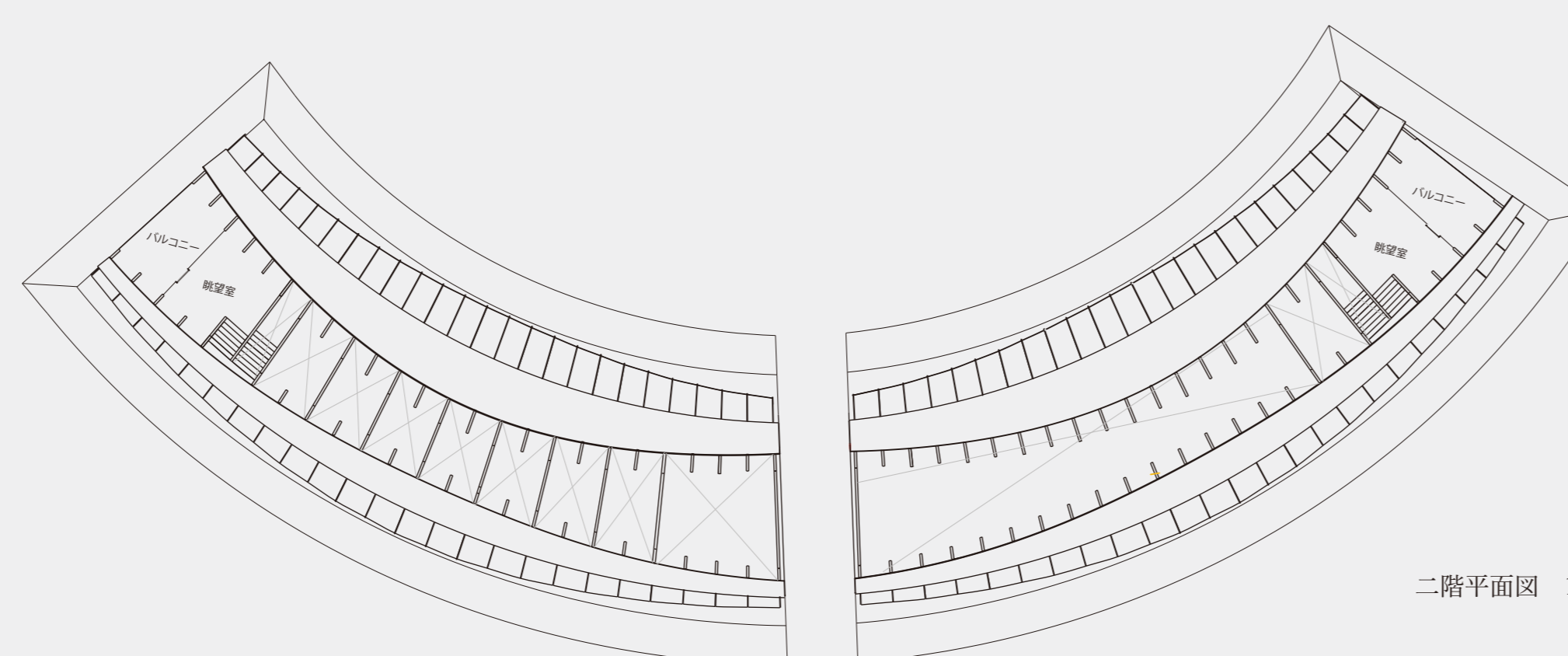
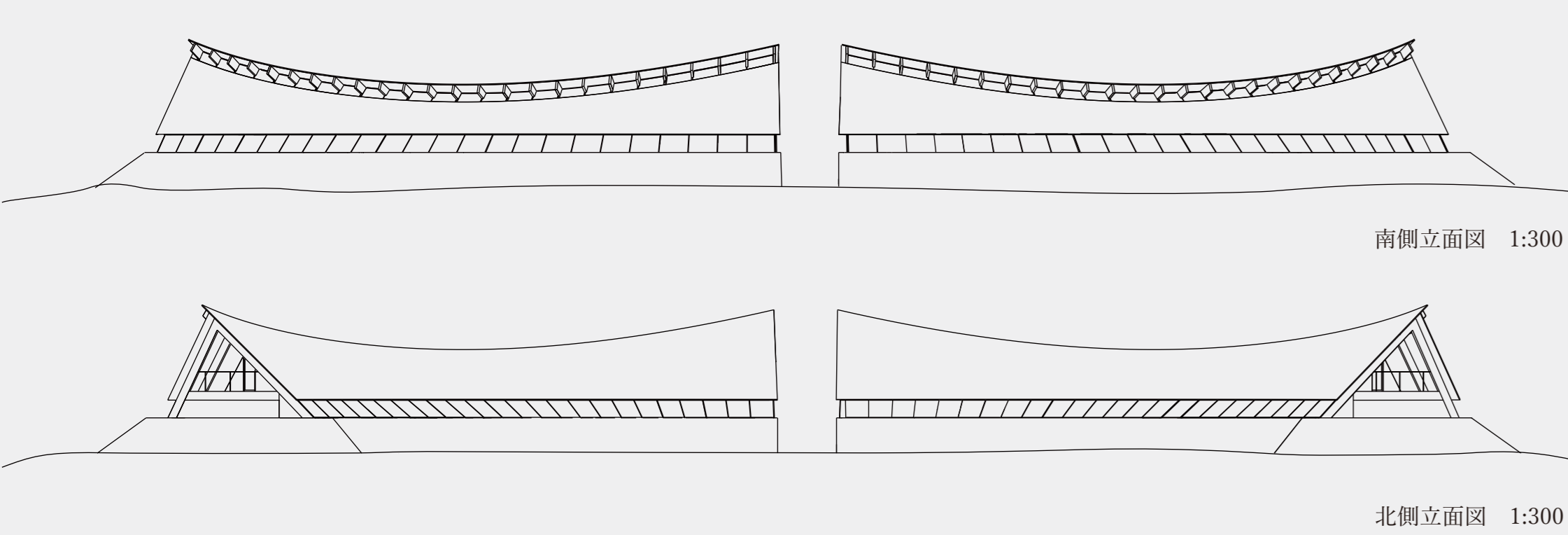
場所：佛生池（月山9合目：佛生池小屋）
地霊対象：池
かつての場：掛け小屋

唯一現存している掛け小屋である。現在は山小屋として運営されている。佛生池は文字通り『仏の生まれる池』で、道者はここで死んで水のみ、魂となって頂上へ行き、月山神社にお参りして生命をもらい、それから（月山山頂にある）神饌池で産湯をもらって生まれ変わるということが由来である。月山紫灯祭時には月山から弥陀ヶ原への中継地点として池のほとりで護摩木が焚かれ祖霊供養の場となる。



計画

紫灯祭時に月山→佛生池→弥陀ヶ原と順に護摩木が焚かれ、火が灯っていく。その中継地点として月山と弥陀ヶ原の軸を繋ぐ場とする。月山内には様々な場所で祖霊供養のためにケルンが積み上げられる。（ケルン＝石を円錐状（ピラミッド型）に積み上げたもの）ケルンの精神と佛生池の場所性が一致しているため石積を基盤に構築していく。池を石積で囲い、そこを建築が囲むように配置していく。池と人間の間をより近づける。軸線と囲いが佛生池に神性を与える。避難小屋兼宿泊施設としての掛け小屋。



6. 遠く、遠く

月山神社参拝後、頂上に着いた。
巨岩に覆われ、遮るものがなく、遠くには鳥海山を望むことのできる場所だ。昔の人はこの地を石舞台のように祖霊や神、自然への感謝の気持ちをここで捧げてきたのだろう。
祖霊は月山か鳥海山へ向かっていくという。
はるか遠い鳥海山と私とこの地は繋がっている、そう感じた。大地という広大なスケールとどこまでも広がる無限の空に身体が解けていくような感覚であった。



場所：月山頂上（1984m）

地霊対象：鳥海山・祖霊

月山神社の裏に頂上はある。巨大な岩に覆われており、舞台のような空間。北方向には山形と秋田の県境にそびえたつ鳥海山を望むことができる。月山と同じく鳥海山も祖霊信仰の山であり、死者の魂は月山もしくは鳥海山の頂きで神になって鎮まると言われている。月山と鳥海山は対となって崇拝され、鳥海山を「下の御山」「お北」と呼び、月山を「上の御山」「お南」とされてきた。また、月山に対して鳥海山を日山として太陽と月、陽と影とみる考えもある。

計画

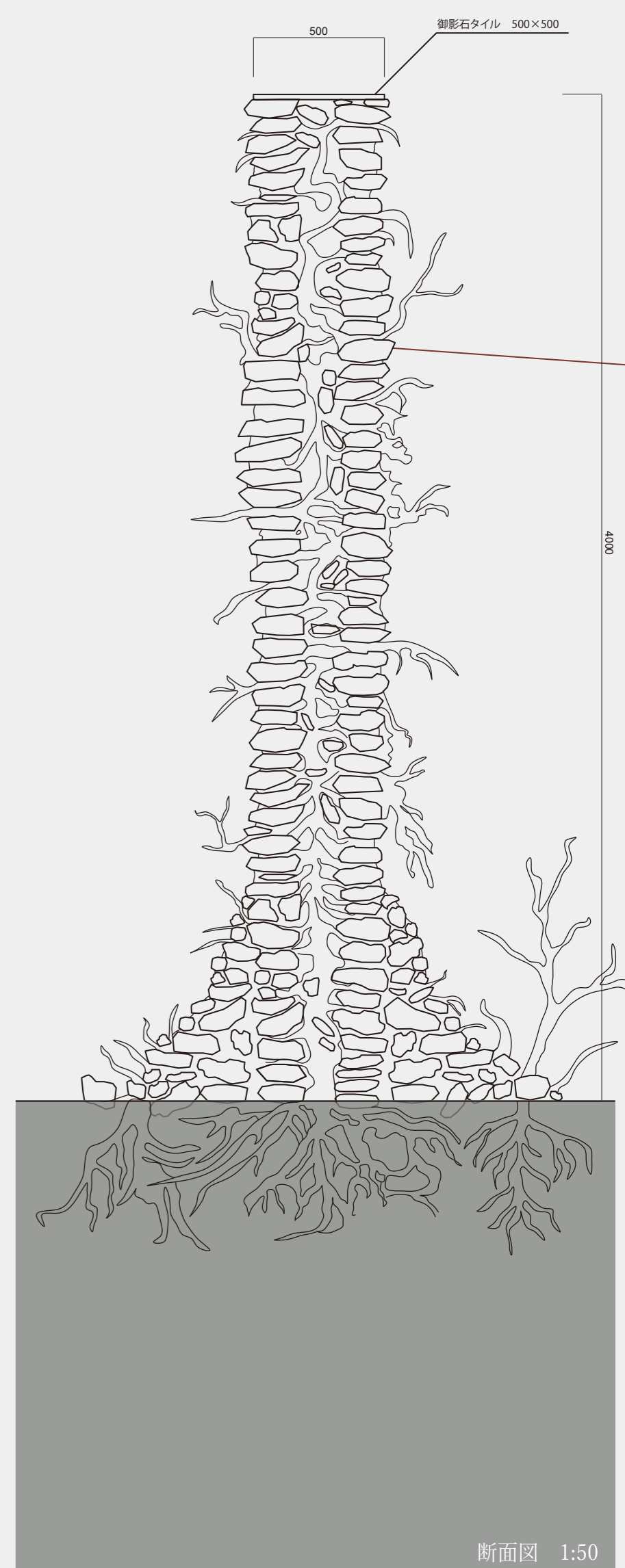
鳥海山へ向かう軸を引き、月山と鳥海山を繋ぐ場の計画。
月山の石を積み上げ軸となる壁を作る。上部には御影石を配置し、空を映す。壁の構造は石の間に粘土と石灰、藁を混ぜて漆喰壁土状に塗り込み、そして間の空洞部分の埋め戻しの中に藁を挟み込んでいく。壁中にも菌糸が張って内部の土や漆喰部分に多孔質状の構造を作り、菌糸と草木根の作用で柔軟に安定していく。
植物が根を張り、生きた壁として軸線の力を強くする。
周囲にある岩を腰掛ける場とする。



月山神社



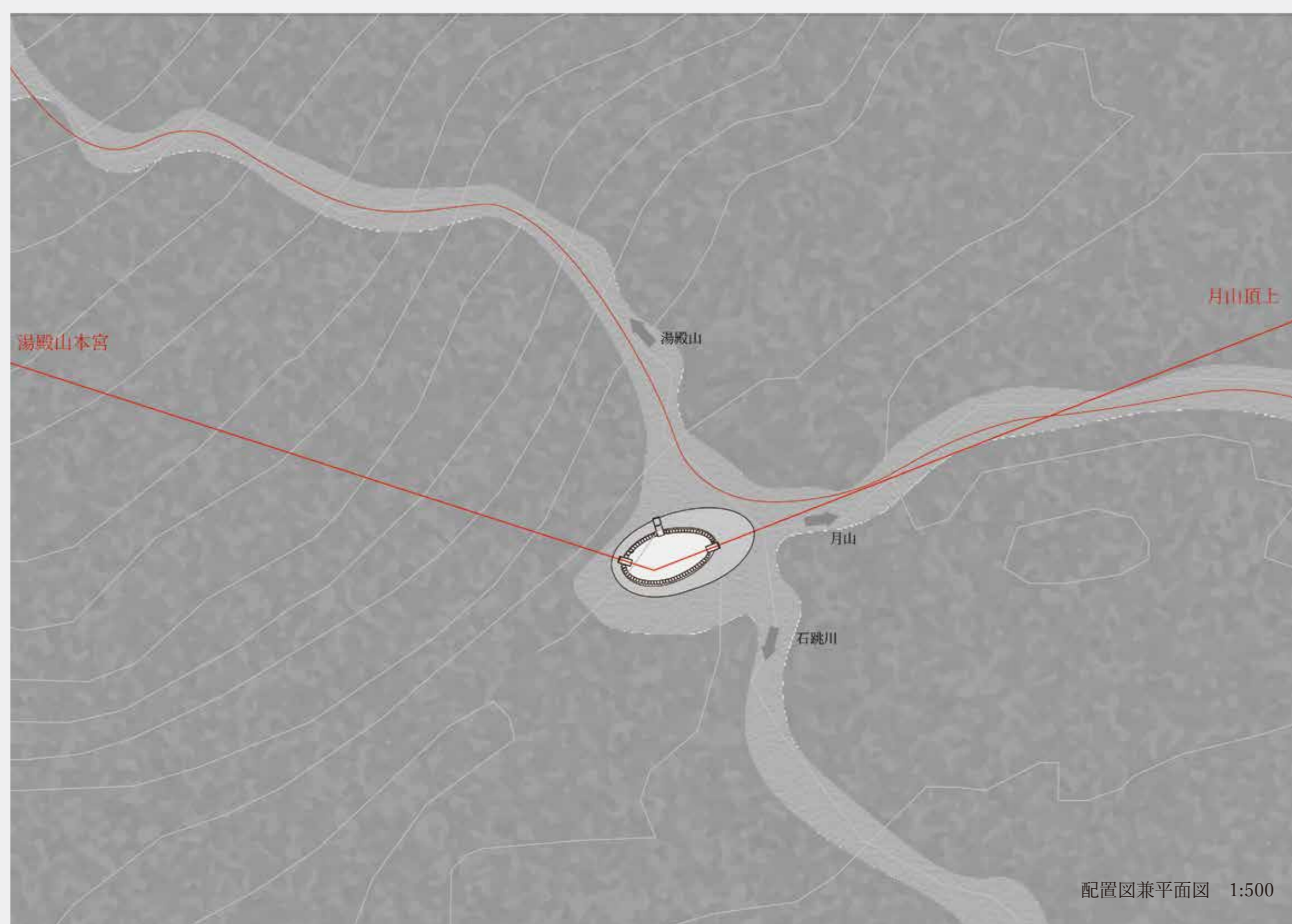
月山頂上



断面図 1:50

7. 一筋の光

月山頂上を超え、歩いていると徐々に周囲が山で囲われだした。その悠々と聳え立つ山々の圧力に押し負けそうにもなる。そんな中、土が盛られた小さな小屋につく。中は暗く、窓は二つしかない。その窓から月山頂上が見えた。さっきまでの頂上はあんなに小さくなっていった。ここまで歩いてきた人間の力強さを感じる。広大なスケールの中に居すぎたせいか自然とこの小さい空間と暗闇が落ち着く。人間にとって大地はあまりにも広すぎるようだ。



場所：装束場（施薬小屋）
地霊対象：月山・湯殿山
かつての場：掛け小屋（更衣室）

装束場は山伏が月山登拝後、湯殿山に向かう際に、衣を着替える場所であったことが由来である。また山伏がこの小屋で薬草でこしらえた薬を渡していたことから施薬小屋とも呼ばれる。月山、湯殿山の中間地点である。現在は避難小屋とされているが廃墟に近い状態である。

計画

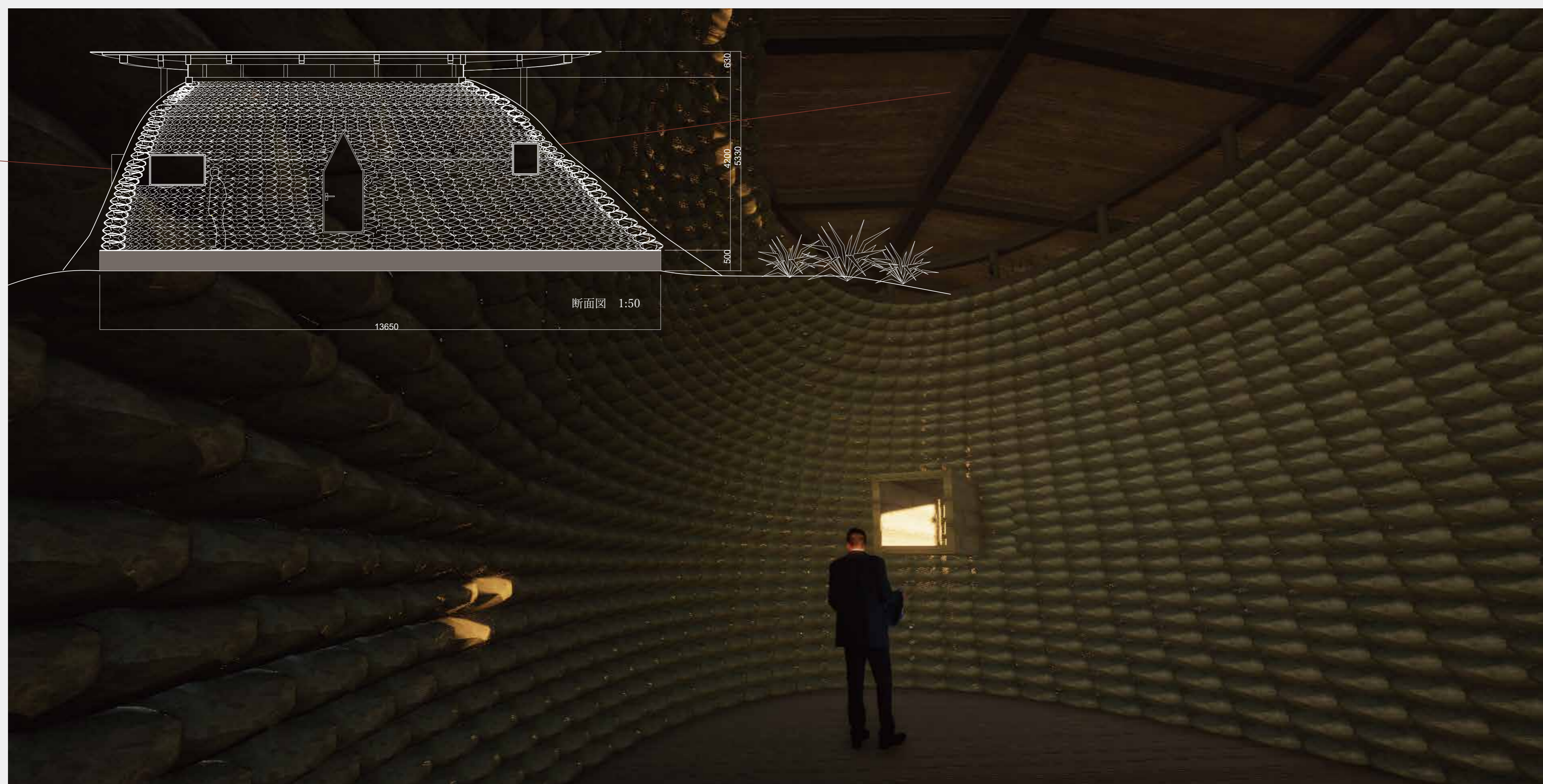
月山と湯殿山の狭間の空間で、周囲の山に囲われた景観。大地の広大なスケール感覚を強める洞窟的空間を計画。
主構造を土嚢とし、ドーム状に積み上げ木造の屋根を支える。土の壁が暗闇を内包し、周囲の景観との関わりを断つ。室内には二方向に窓が伸び、それぞれ月山と湯殿山を指さす。これまでの道のり、これからの道のりを闇の中で思い起こす。



装束場から望む月山



施薬小屋



8. 我々と風土

湯殿山参拝後、奥に伸びる洞窟のような空間へと素足を運ぶ。
 湯殿山御滝から出る水の粒を感じ、自然の微細さを感じる。
 暗闇をかき分け、最後の掛け小屋に辿り着く。
 庄内平野を一望できる場であった。
 大地の巨大なスケールの中で我々の存在の小ささに改めて気づかされる。身体はすでに疲れ果てているが、不思議と精神は前向きであった。全身を自然に委ね、身体を酷使し、日々の悩みなどもなくなった。地にうけることができたのだ。



C 庄内平野を望む眺望



場所：湯殿山御滝
 地霊対象：地平線、滝、粒子

湯殿山御滝は羽黒修験道の滝行の場であった。湯殿山から噴き出す温泉の影響で周囲の岩壁は茶色く変色している。修験道者は修行の際は川を上り、滝行が終わった後は30m程の梯子を登り、湯殿山本宮へ向かう。現在は修験道者以外の立ち入りは禁止されている。尚、湯殿山本宮への参拝は裸足で行う。



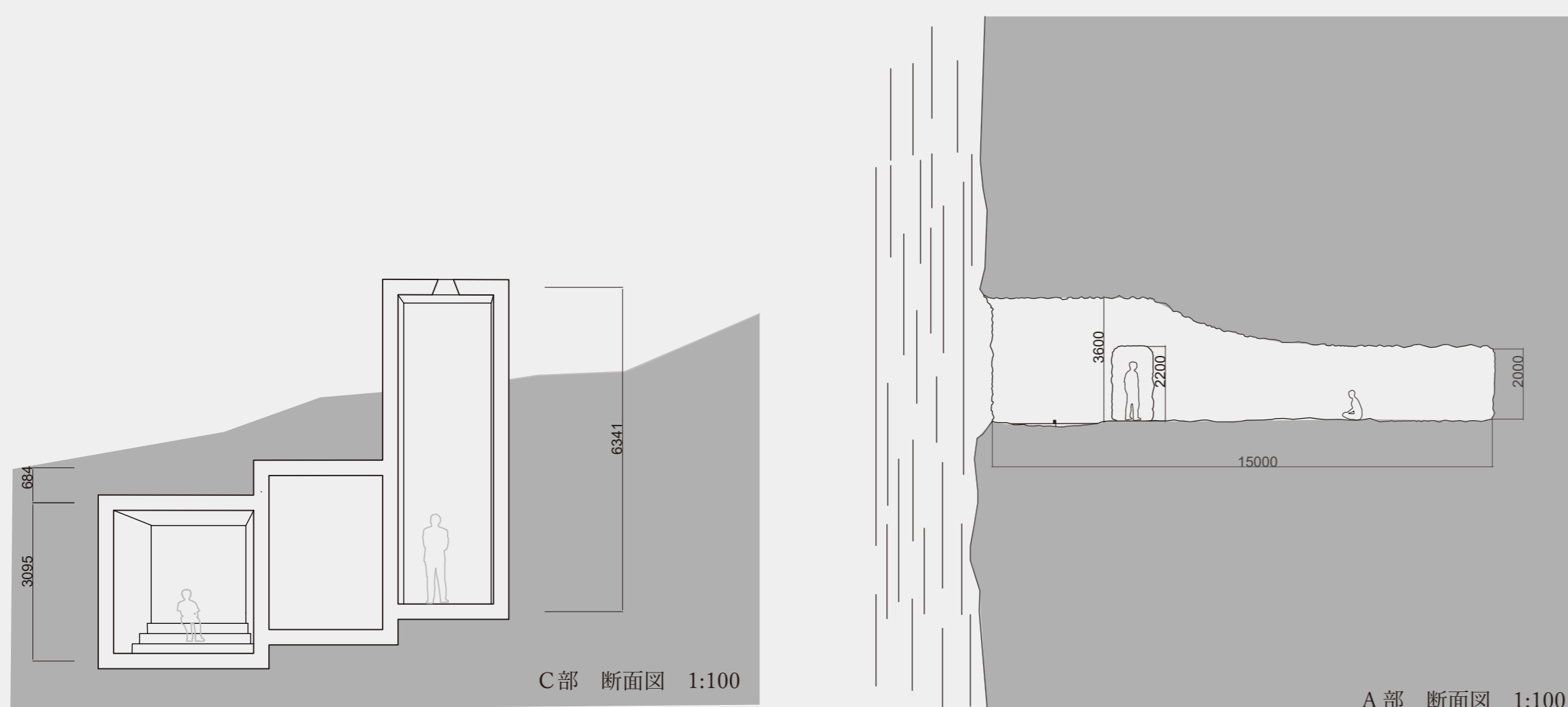
湯殿山御滝

計画

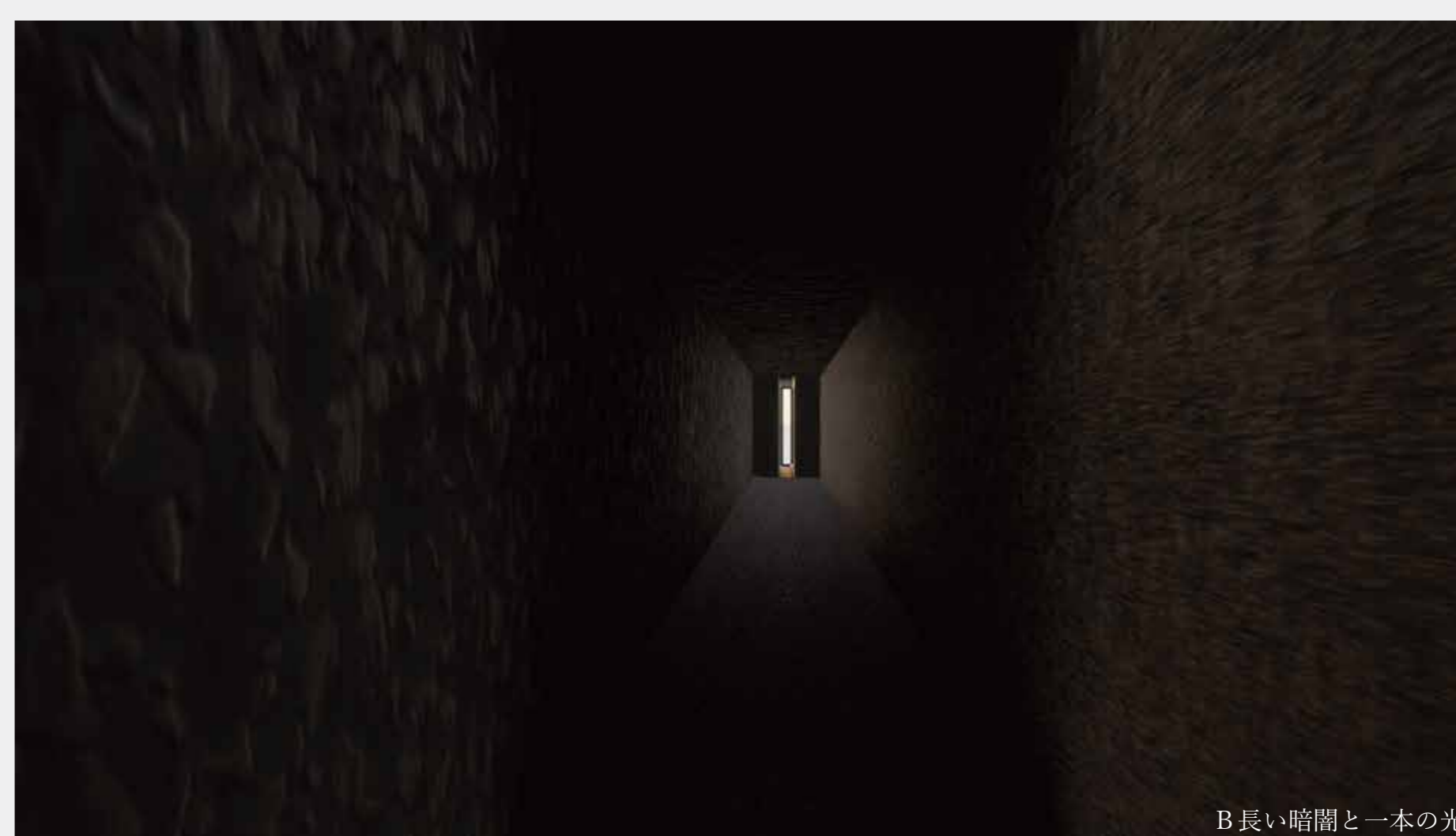
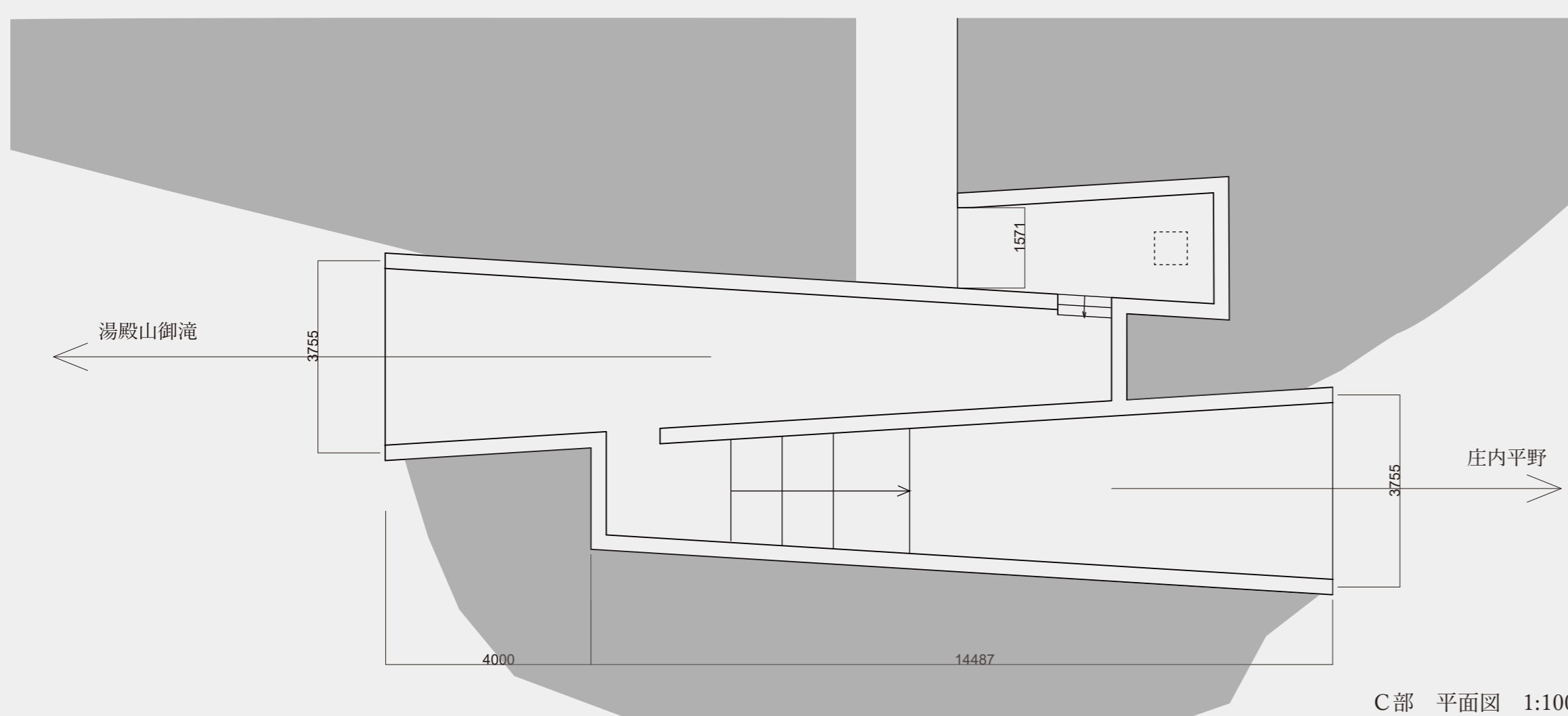
洞窟は人間の始原である。古代より、生物のシェルターの役割を担うとともに、その神秘性、身体的変化（酸素濃度の低下）から儀式の場として神との交信を行う場であった。
 湯殿山御滝の脇を通り、最終地点として庄内平野を一望できる場に繋がる長尺の洞窟空間の計画。光と影が入り乱れ、微細な空気を超えた先に、広大な眺望が待っている。湯殿山参拝後、裸足のまま訪れ、岩、土、水の冷たさに直接肌が触れる空間。



湯殿山本宮



A 滝の裏の空間



B 長い暗闇と一本の光